**梅隠**

梅隠の名前は、他の植物より先に花を咲かせ、春の訪れを告げることから縁起物とされている梅を連想させます。梅隠の中には、茶道の千家の三代目当主である千宗旦（1578～1658）好みの様式の伝統的な茶室のレプリカがあります。宗旦は、日本の茶道の発展に多大な影響を与えたことで知られる著名な茶人、千利休（1522～1591）の孫でした。

ほとんどの茶室の場合、訪問客は外から直接茶室へ入りますが、梅隠を訪れた訪問客はまず、屋根と土壁に囲まれた飛び石のある通路を通ります。中に入ってすぐの狭い4畳半の小間は、千宗旦の元々の設計図を元に建てられました。後部にはより大きな茶室があり、2室の間には準備のためのスペースがあります。茅葺き屋根、土壁、そして荒削りした栗の木で作られた床の間の柱は、茶の湯をたしなむ人々が大切にしている侘び寂びの美学を反映して、素朴な美しさという印象を作り出します。

茶室の近くには水琴窟という、伝統的で音楽的な庭園設備があります。石の手水鉢の前に、底に穴の開いた壺が状態で地中に埋められています。手水鉢から壺へ水が滴る時、鈴またはツィターの一種である琴によく例えられる、穏やかで音色の良い水滴の音がします。訪問者は、手水鉢の脇の地中に差し込まれた竹の管を通して、その音を聞くことができます。